

気になるニュース

わたしの視点

岐阜新聞 2025年12月27日付 県内

12月17日付の県内版に、大野郡白川村の義務教育学校白川郷学園で、「村の困りごと解決プラン」としてビジネスプランコンテストの発表があり、地域の課題を解決するアイデアが6チームから発表された、という記事がありました。中学の段階で、ビジネスプランを作るという取り組みは県内でも珍しいとのことでした。起業家を育成する「アントレプレナーシップ教育」が大学を筆頭に、中学にまで拡大しています。

このような起業家育成のプログラムでは、白川郷学園のように、その地域が抱えている課題に対して、どのような解決策が考えられるか、それをビジネスとして取り組むことができないか、という地域課題解決型のプランが多く見られます。このようなビジネ

道家経営・法務事務所代表 道家睦明さん

白川郷学園、起業家精神育成に力

スを立ち上げる事業者は「ローカルゼブラ企業」と呼ばれます。「ゼブラ」（シマウマ）とは、利益追求だけでなく、社会課題の解決と経済成長の両立を目指す企業を指し、シマウマの白黒模様に例えた言葉です。

地域の課題を自治体などが解決するには限界があり、以前からPFI（民間資金活用による社会資本整備）といつて官民での事業だったり、指定管理者制度だったりがありましたが。しかし、その限界も超え、すべて民間で解決していくこという流れになっています。

この考え方は、社会課題の解決だけに限らず、どのような課題に対しても、活用できる発想ではないでしょうか。みなさんのお事業においても、地域においても、「ゼブラ」的な発想で、新しい取り組みをしてみませんか。

どうけ・むつあき 1965年、羽島郡笠松町生まれ。慶應大学部卒。中小企業診断士、行政書士。広告会社勤務を経て、道家経営・法務事務所代表取締役。県中小企業診断士協会会長。笠松町在住。

「ゼブラ企業」には、一時的に「解決する」だけではなく、事業を「継続させる仕組み」が必要です。記事にもある

（引用記事は岐阜新聞デジタルの紙面ビューア27日付朝刊最終面に掲載）

次回は2026年1月10日付に掲載予定

白川郷学園 「起業家精神」育成に力

観光客マナーや森林活用 コンテストで提案



12月17日付3面より

村の困りごと 解決プラン

るよう、「ロボット型のミニ箱に、広告機能をつける」といった形で、事業そのものが継続的に運営していく仕組みが求められます。

そのような仕組みは、既存する事業の新しい組み合わせで実現することが多く、新しい組み合わせという意味での「ゼブラ」的な発想が、社会課題を解決する仕組み作りのポイントになっているようです。

「ゼブラ」的発想がポイント